

特集

22年前の金環日食

藤原晴美（ユニバーサルデザイン天文ワーキンググループ・関東支部）

はじめに

これは、1987年9月23日の金環日食の体験記で、私が参加していた天文同好会の会報「星の伝言板」に投稿したものです。そのために、(当時の)同好会関係者にしかわからない箇所があるかと思いますがご容赦ください。なお、今回『天文教育』に投稿するに当たり、原文中の個人名は伏せてあります。

これを書いたときに使用した日食当日の私のメモには、もう少し詳しいデータ(時刻、食分、参加者の言動など)も記録してあったのですが、今日そのメモが行方不明のために訂正や加筆ができなすて、かなりあいまいな印象のレポートになってしまいました。

今から20年以上前のことなので、私は『天文教育』への投稿を躊躇っていました。8月9日から11日に開催された研究会に参加させていただいて、その場で投稿すると表明してしまいましたので、昔話ですが、思い切ってご披露することにしました。

この時の観測ツアーは、私が所属していた天文同好会と、もう一つの東京の天文同好会の共同企画で実現しました。もちろん私は全盲ですので、ツアーには私の父が同行していました。

1987/09/23 沖縄金環日食

何もかもが初めてづくめだった。飛行機に乗るのも、沖縄への旅も、そして金環日食の観測も、私には初めての体験だった。秋分の日を挟んだこの3日間のことを、私はたぶん一生忘れないだろう。

観測場所は琉球村（1987/09/22）

那覇空港からバスに乗って、観測地の下見のために琉球村という所へ向かった。金環食の中心線からは10数キロほど南に位置しているという。

バスから降りた私たちを、南の島に降る暖かい雨と、スピーカーから流れて来る沖縄の民謡と、やや金属的な断続音 — カンカンカン… — といった音、実はセミの鳴き声であることがすぐにわかった — が迎えてくれた。ここは亜熱帯の植物や、沖縄の工芸(陶芸や染色など)を紹介している観光施設で、この中で適当な場所をそれぞれ見つけてほしいということだった。

ここでなら私の目的が果たせそうだな。いや、ここ以上の場所はあるまい。木があつてセミがたくさんいる。きっと野鳥も飛んで来て泣いてくれるだろう。そのうえ、ここでは家畜 — ウシやヤギなど — も飼われているようだ。

金環日食のとき、動物たちの様子がどう変化するか見たいと思っていたのである。それに、木漏れ日の写真も、ここできっと写せるに違いない。(雨降りの夕方だったのでよくわからなかったが。)

ツアーのメンバーどうし、顔を合わせる度に、明日の天気の話が飛び交う。天気予報は「曇り時々雨」と絶望的である。

でも、私は相変わらず非科学的なことを言い続けていた。「太陽観測のI先生と、偶然同じ沖縄行きの飛行機に乗り合わせたのだもの、日食が見られるに決まっている」と。

日陰で日食を見る？ 1987/09/23)

バスでホテルを出発して、9時少し前、琉球村に到着。みんな思い思いの観測拠点に散って、早速準備やテストに取りかかった。

「降水確率80%、大雨注意報」という、朝のテレビの天気予報を、頭上の空は完全に裏切っていた。時折雲が足早に太陽を掠め過ぎるものの、陽射しはまるで真夏の昼過ぎのように厳しい。投影板の前でUさんが、「絶対大丈夫だよ。黒点が見えているもの」と言っている。「やはりI先生のおかげだ」と、私がまた何度も口にしたことは言うまでもない。

私は少し歩き回って見た後で、ショーハウス(ハブとマングースが戦うのを見せていた)へ向かう道の途中にちょっとした木陰を見つけて、そこに落ちつくことに決めた。

私が飛行機で沖縄に運んだ観測機器は、

- ・ボタンを押すと現在時刻を秒の単位まで読む音声時計 1個
- ・記録用のカセットテープレコーダー 1個
- ・私の四感(視覚以外の感覚)

である。カセットテープレコーダーや時計に異常はなかった。

昨日聞いたのと同じセミがしきりに鳴いている。右手の方からは、Uさんたちのグループの音が聞こえて来る。スピーカーの民謡が少々気になるが、木漏れ日の観察にも打ってつけの場所らしい。

9時50分。テープ録音開始。ここでこれから3時間あまり、ずっと腰を下ろしているつもりである。私は太陽を見ないのだから、あえて暑い日に向に陣取る必要はない訳だし、私の観測機器たちにとって直射日光は大敵だ。観測ツアー参加者の中で、おそらく私が一番楽をすることになるのだろう。

しかし、望遠鏡でも遮光グラスでもカメラでもなく、カセットテープレコーダーと時計を隣に置いて、涼しい木陰に座り込んで日食を見守る打なんて、考えて見れば滑稽な

話である。

金の環 — 食分 0.971

10時1分。太陽の右上の方から欠け始めていることが、サングラスを通して肉眼でも確認できる。(参加者の声)

相変わらずセミの音が賑やかだ。観光客が大勢通ろうと、呼び出しアナウンスがあろうと鳴き止まない。いや、さすがに沖縄のセミである。低空を飛ぶジェット機のすさまじい爆音にも、全く知らん顔で鳴き続けている。そうだ、「大砲の音ではセミは逃げなかった…」とあるのは、ファーブルの昆虫記だったろうか。

日向に腕をかざすと、「暑い」という感じがする。また、雲が太陽を隠すのが、皮膚で感じる温度変化でよくわかる。

10時43分。Uさんたちの話し声がよく聞き取れるようになった。セミの音が少し静かになったということだろう。

10時47分。ヤギたちが騒々しく鳴きだしている。何かに怯えているかのようだ。丸かった木漏れ日が、半分ほどに欠けて来ているのに気づく。(参加者の声)

11時1分。涼しい風が吹く。足下には三日月型になった木漏れ日。何人かがそれを見に来て、「わあ、きれい…」、「これは不思議だ…」などと言っている。

11時8分。数匹のセミが鳴いているだけになった。

地面に落ちた物の陰の輪郭がぼやけて見える。手の指の付け根に水掻きができたようになった陰が、白い紙の上に落ちる。(参加者の声)

人々のそんな話を聞きながら、細くなった太陽の姿を想像して見るのは楽しい。1963年の皆既日食のテレビ中継の画像と重なって、少しずつ変化して行く太陽が、はっきりと目の前に浮かんで来る。

金環食まであとやく 15 分だ。望遠鏡と太陽投影板の周りにいる人たちから、緊張した雰囲気伝わって来る。

11 時 19 分。「これからは太陽の端が延びだします」というUさんの声。私も、投影板の上の太陽像を見ているような気がした。

空の色が濃くなって、夕方のように暗くなって来た。(参加者の声)

11 時 23 分。「はい、くっつきました。金環です」とUさん。短い歓声と、ばらばらとした拍手が続く。

遠くでセミが 1 匹だけ鳴き続けている。

木漏れ日は地面の上で完全にリング状になった。(参加者の声)

11 時 24 分。セミが鳴き止んだ。

さっきまでニワトリが歩き回っていたのだが、みんなどこかに姿を隠してしまった。(参加者の声)

また数人が、私の傍らの地面の木漏れ日を見に来て、「これは珍しい」と言っでは写真を撮って行く。

11 時 27 分。「金環終わりです」の声。私にはとても短い 3.8 分であった。

11 時 31 分。数匹のセミが鳴き始めた。

11 時 37 分。食が始まって間もない頃のセミしぐれと変わらないほどの、たくさんのセミが鳴いている。

しかし、日向に腕を差し出しても、まだ暖かさは感じられない。セミは何を感じて鳴き止み、また泣き出したのだろうか。

11 時 45 分。雄鳥が 1 羽姿を現した。(参加者の声)

12 時 20 分。ニワトリが何羽も出て来て歩き回っている。彼らはどこに隠れていたのだろうか。ヤギたちはのんびりとした調子で鳴いている。

暑い、第 4 接触までまだ 40 分もあるのに、もう真夏の陽射しが完全に戻って来たようだ。

雲が、欠けて行く太陽を時々隠して、空を見上げている人たちをやきもきさせたこともあったが、金環食中、ずっと太陽が見えていて本当によかった。

最後にお詫びを

私が住んでいる所では聞いたことがない「カン、カン、カン、カン…」というような鳴き声の、あのセミは何というセミだったのだろう。地元の人には「ミンミンゼミ」と呼んでいたが、鳴き声は「ミンミンミン…」とは聞こえなかった。

私がさぼって何も調べていないためなのだが、セミの本当の名前は今もわからない。—これを読んでいる皆さん、ごめんなさい。

→